

それぞれの連休明け

校長 武井 正明

大型連休明けの朝。今夜は会合があるので見附駅まで送ってもらった。駅に着くと、可愛く、切ない場面に遭遇した。

黄色い帽子をかぶった女の子、半泣きだ。明らかに腰が引けている。その傍で「おかあさんが一緒に行こうか？」と母親。かわいそうで見られていなかった。私がじいちゃんなら、即「今日だけ爺の家にいることにするか？」なんてやってはいけない助け船を出してしまいそう。きっと今朝は、全国各地で似たような光景が見られたことだろう。

信越線から弥彦線へ乗り継ぐ。五十嵐川を鉄橋で渡る、この弥彦線が好きだ。曇り空の向こうに粟ヶ岳が見える。世の中がどう変わろうと、この山や川は、ずっと昔から変わらない。電車の進みとともに、連休のフワフワした雰囲気から徐々に日常に戻っていく。

車内では、立ちながら教科書を広げている女子高生がいた。途中から乗り込んできた女子高生が、ずっと彼女の隣に立って彼女も無言で教科書を広げる。ガタンと揺れた瞬間、互いにバランスを失って目を合わせ笑い合う。休み明け、いきなりテストかな。彼女たちは青春時代のど真ん中。吉中の卒業生たちも、こんな感じで友達が出来ていたらいいな。

皆さんはこの大型連休、どんなふうにごすごしましたか？

私は生まれてからずっと、この期間に家族旅行など無縁の人間です。ただ、唯一憶えているのは、まだ家も疎らだった寺尾の実家の砂地の庭に、気持ちよく泳ぐ鯉のぼりです。

住宅が多くなった今は、殆ど見かけません。昔はどこの家も鯉のぼりを立てたものです。

あの頃は何もなかった。休日は、親父はいつも仕事。働いているのに、いつも金がない。そんな家ばかりだったような気がする。金もないのに、鯉のぼりだけは、だいたいの家で立てていた。まるで競うかのよう。

加茂川を泳ぐ大量の鯉のぼりも、壮観で見応えがあっただけで、やっぱりそれぞれの家の庭で泳いでいた鯉のぼりは、青い大空を広々と風になびいて、気持ちよさそうだったなあ…。時間の流れも、今と違ってゆっくりだったのは歳をとったせいかな。

あの鯉のぼりを思い出すと、あの頃の、笑顔の両親と弟、自分が浮かんでくる…。

両親にとって、あの頃が一番しあわせな時代だったのかもしれない。

さあ皆さん、また今日からいつもの日常が始まります。

少しずつ、ゆるゆると戻していきましょう。今週のあなたは50点でじゅうぶんです。